

徒然漫歩歴史紀行



蘭・英、平戸で衝突
捕獲された常陳船
英商館長コックスの苦悩
コックスの解任と死



目次

1. [蘭・英、平戸で衝突](#)
2. [捕獲された常陳船](#)
3. [英商館長コックスの苦悩](#)
4. [コックスの解任と死](#)

徒然漫歩歴史紀行



蘭・英、平戸で衝突
捕獲された常陳船
英商館長コックスの苦悩
コックスの解任と死

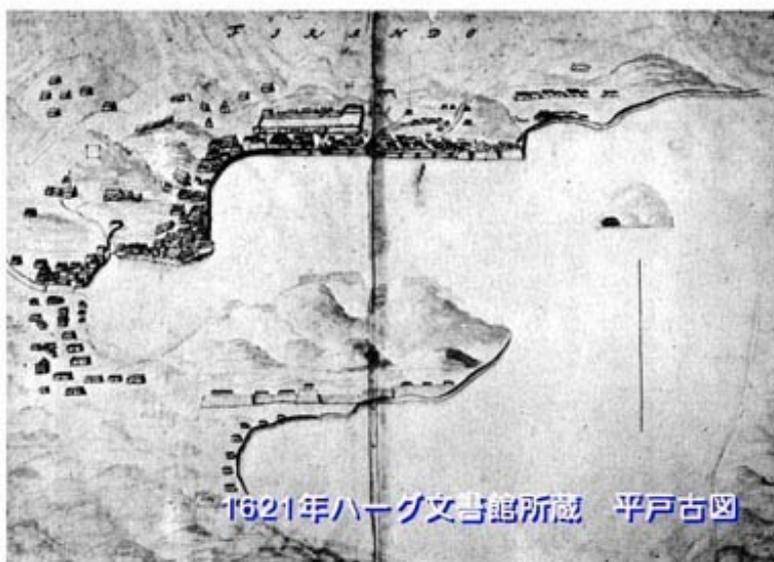


蘭・英、平戸で衝突

平戸、全島面積約一六五平方キロメートル、その中でも我々が観光地平戸として知る部分は、港を中心としたほんのわずかな区域にかぎられている。しかしこの小さな区域内に、かつてオランダ、イギリスという敵対する二箇国の商館が並び建っていた。

今日、我々が平戸口からフェリーで平戸港に入ると、いやでもその右手に石積みのオランダ埠頭の跡が目に入る。さらに右手には、「常灯の鼻」と呼ばれるオランダ灯台の跡があり、今から三百年ばかり昔には、夜間はほのかな常夜灯が、昼には赤・白・青三色に染め分けられたオランダ国旗が風になびいてその所在を知らせていた。

これに対してイギリス商館跡であるが、これは今となっては判然としない。それは営業不振のため、イギリスが意外と早く日本から手を引いたためであり、ただオランダのハーグ文書館所蔵「元和七年平戸古図」によって、今の親和銀行から平戸市役所にかけての一带がそうではなかったかと推測されるのみである。



平戸オランダ商館跡
イギリス商館跡

ところで大航海時代の幕開けは、周知のごとくイベリア半島を地盤としたポルトガル、スペインという二大旧教勢力によって争われた。しかし十七世紀に入るや、新たな勢力オランダ、イギリスが台頭してきた。この新興二勢力は、株式会社の前身ともいえる東インド会社を結成し、組織的商業活動によって旧教勢力に挑んだ。初期資本主義の洗礼を受けたこの二国の前に、イベリヤカトリック王国は今や追われる者の立場に置かれたのである。

東南アジア各地で熾烈な勢力争いが繰り広げられた。しかし、このオランダとイギリスは共通の敵と戦いながら、少なくともこの年、一六二〇年に至るまでは共に連合することがなかった。それどころか、互いに相手を敵としてしか意識しなかったのである。

その二国が、この狭い平戸の中で顔を突き合せて暮していた。両商館の間は、現在我々がぶらぶら歩いたところで、十五分もかかるかどうかという位の距離である。まるで爆弾でも抱えているようなものであった。

現に一六一九年には、オランダ艦隊がイギリス商船スワン号、アッテンダンス号二隻を捕獲し、これを引きずるようにして平戸へ入港した。この時である。オランダ船の捕虜となったイギリス人水夫数名が脱走しイギリス商館に救いを求めた。イギリス商館長リチャード・コックスは、オランダの行為を不当とし、領主松浦隆信に訴えた。さらに二代将軍徳川秀忠にまで上訴した。しかし、答えは常に同じであった。

「外洋における争いには関知せず」、つまり、このイギリス商船捕獲が日本の領外で起った事件であるとして、幕府も平戸藩も介入を拒否したのである。

やむなくコックスは、直接オランダ商館相手にその不当を抗議した。だが強気のオランダ側はこれを一蹴した。それどころか脱走したイギリス人捕虜の引き渡しを求め、オランダ人水夫六〇〇余名が徒党を組み一団となってイギリス商館を襲ったのである。記録によれば、その襲撃すること「日に三度におよんだ」と言われている。

この時、平戸の住民はこぞってイギリス側に味方し、それこそ町中が蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。平戸藩主松浦隆信もさすがにこれには驚いた。こうなっては知らぬ顔もできず、自ら ^{かつちゆうぐそく} 甲冑具足 に身を固め人数を繰り出しやっとのことで双方を取り ^{しず} 鎮めることができたのである。

しかし、このような争いにも休止符の打たれる時がきた。一六二〇年七月、バタヴィア（現在のジャカルタ）から「蘭英同盟」成立の知らせがもたらされたのである。隆信も平戸の住民もホッと胸をなでおろす思いであった。だがこの知らせを誰よりも喜んだのは、平戸イギリス商館長リチャード・コックスではなかったろうか。日本へ来てすでに六年、イギリスの利益と名誉のために、彼はずいぶんと努力し働いた。にもかかわらず、イギリスの対日貿易は、軍事的にも経済的にも圧倒的優位を誇るオランダの妨害の前に、常に赤字続きという有様であった。本国にいる東インド会社役員の中には、本気で平戸商館閉鎖を考える者さえいたのである。

そこへこの「蘭英同盟」成立の知らせである。コックスはさぞや思ったことであろう。「これですべてが好転するに違いない」と……。

しかし、その喜びも束の間、この年八月、蘭英両商館存亡に関わる事件が発生した。

俗に言う、平山常陳事件がこれである。

捕獲された常陳船

車窓にひろがる西海の海と空を楽しみながら、平戸^{さんばし} 棧橋からおよそ十五分あまり、バスは鄭成功ゆかりの千里ヶ浜を抜け、寂れた川内の町並みへと入る。その町並みを抜け切ったところが川内浦の埠頭である。かつてオランダやイギリスが平戸港の副港として、船の補修や風待ちに利用したところだ。その入江の奥に立って海の方へ目を向けると、まるで湾を抱えこむかのように、丸山の丘が海に突き出して見える。かつてはこの丸山の地に、遠来の船乗りたちを迎えるべく酒楼が設けられ「絃歌頻りに起って歡樂境をなし」、真夜中となってもこの地だけは喧噪と灯りが絶えなかった。のちの話であるが、オランダ商館が長崎出島に移された時、この地の遊女らもその地名と共に移り、いわゆる「長崎丸山遊廓」名称の起りとなったと言われている。



平戸港から河内浦に向かう途中にある千里浜（左の写真は鄭成功誕生の地）



コックス甘藷栽培地



↓丸山



平戸港の副港として使われた河内浦

それはさておき、一六二〇年八月四日の早朝、この川内浦の沖に一艘のイギリス船が姿をあらわした。エリザベス号である。また英船ムーン号、蘭船トラウ号も、この日やや遅れて川内浦へと入港した。しかしそればかりではない。意外にもエリザベス号は、ルソンから帰港途上の平山常陳の朱印船を捕獲曳航していたのである。

ところでこれら艦船は、同年五月、バタヴィアにおいて蘭英同盟に基づき、蘭船五隻、英船五隻から編成された連合防禦艦隊の一部であった。艦隊は三々五々バタヴィアを出港し、スペイン、ポルトガル船の捕獲を目的として各々中国沿岸を搜索したあと、平戸に集結することが命令されていた。しかし日本船および第三国船の捕獲は、五月三十日付防衛会議艦隊指令書によって厳

重に禁じられている。ただマニラに向い、またマニラより還る中国ジャンク船に遭遇したる場合のみこれを奪掠の目的にて攻撃し得ることが例外として定められていた。

おそらく平山船の捕獲は、この中国ジャンクと見誤ったことだったのであろう。当時、海外渡航朱印船は和船は使われず、多くの場合、中国製ジャンク船が使われた。またシャム船、交趾船も使われた。西洋式造船術の導入に伴い、末次船や荒木船に見られるような、西洋式ガレオンと中国ジャンクの折衷といった様式まで登場した。しかし、その船体構造はどの場合をとっても基本的にはジャンクである。このため対日貿易に携わるイギリス人やオランダ人は、これら朱印船をも中国船同様「ジャンク」と総称したほどであった。しかもこのとき、平山船はスペイン領マニラからの帰港途上であった。エリザベス号がこれを中国ジャンク船と見間違え捕獲したのも、また無理からぬことであろう。

総指令官ロバート・アダムス提督は言う。「我等は同船を獲得するを得べきや否やにつきて迷いつつあり」と。（大日本史料十二-三四）

しかし、アダムス提督の迷いを一時に払拭させるようなものが平山船から発見された。船底に積み込まれた生乾きの鹿皮のあいだに、日本に潜入すべくスペイン商人に身をやつした二人の宣教師が潜んでいたのだ。アウグスチン会宣教師ペドロ・デ・ズニガ神父とドミニコ会宣教師ルイス・フローレス神父の二人であった。事態は一変した。今や平山船の捕獲は不当というどころか、日本の国禁を犯した犯罪人逮捕に協力したようなものであった。アダムス提督はついにこの捕獲を正当なものともみなし、平山船は蘭英共同の獲物とされ、平戸へ曳航されることが決定されたのである。

やがて無数の櫓音がこの川内浦へと近付いてきた。これら艦船を平戸港へと導くべく、イギリス商館長リチャード・コックスによって派遣された小舟の群であった。「パーチャス廻国記」は記す。

「我等はコチエ（川内）と呼ばるる平戸の港に到着せり、平戸の碇泊所より南方約四哩半に位す、火曜日なる七月二十五日（新暦の八月四日にして元和六年七月六日に当る）、キャプテン・コックスは、船側に数多のフネ即ち軽舟を派して、我等を助けたり、（神の加護によりて）午後に至りて、我等は平戸の港に到着することを得たり。」（大日本史料十二-三四）

まるで当時の光景がよみがえってくるようである。だが往時マストの林で埋まったこの川内浦の埠頭も、今ではすっかり寂れてしまい、ただ申しわけ程度に残された石積みの埠頭の一部が、唯一、昔を偲ぶ手がかりでしかなかった。

英商館長コックスの苦悩

川内浦から平戸への帰り道、千里ヶ浜の裏の山手に「リチャード・コックス甘藷栽培の地」と伝えられる所がある。かのウィリアム・アダムス（三浦按針）が一六一五年、琉球から持ち帰ったものを、コックスがこの地で栽培を始めたのだという。コックス日記一六一五年六月十九日の条に言う。

「今日庭づくりして、甘藷を植えた。苗は琉球から持ってきたもので、日本に植えたのはこれが初めてである。庭づくりに毎年一テイ、即ち五シリング払わなければならない」と。（皆川三郎 訳）

以来、コックスの庭園づくりは平戸では有名となった。寺小屋の主人をはじめ平戸藩の家老や僧侶、中国人ら、彼を知る様々な人たちが、彼のために色々な苗木を贈った。みかん、桃、いちじく、ぶどう等々。たちまちコックスの庭園は豊かなものになったという。コックスの人柄が窺えるようでおもしろい。

もちろん、人が好いばかりではない。彼の性格を特徴づけるいま一つの傾向は、祖国に対する愛国心の強さとそのプライドの高さであろう。イギリスの権益に関わる外部からの圧力には、たとえそれが領主であれ将軍であれ、堂々と意義を申立てた。また蘭人と共に対日折衝の場に立つ時は、必ずコックスが上座に着いた。それはオランダ商館長が、単に東インド会社の代表にすぎず、それにひきかえコックスは、イギリス国王ジェームズ一世より信任状を与えられた正式な国家代表であるという自負心から出た行為であろう。

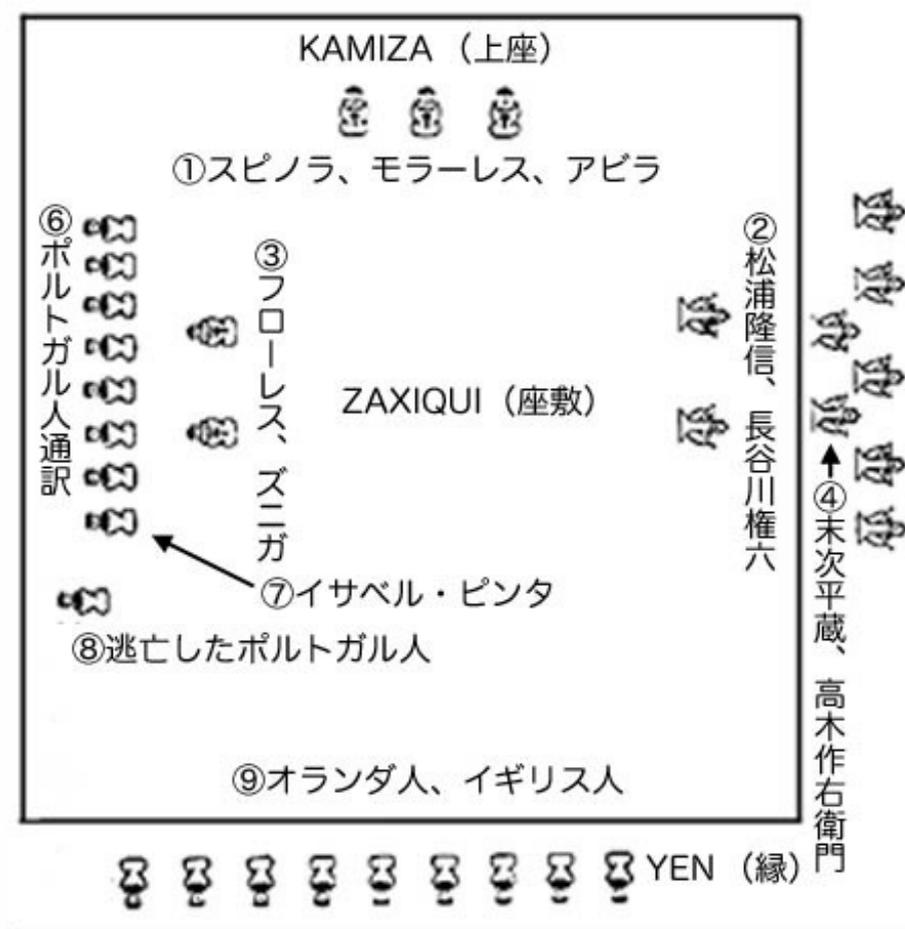
要するに、コックスは常にイギリスとイギリス国王の名誉を代表して行動した。しかし、その祖国への一途な姿勢が、かえってこのあと彼の不幸な死を用意する一因とさえなったのである。しかし、それはまだ後のことである。今はまず平山常陳事件についてさらに話を進めていくことにしよう。

さて平山船拿捕に伴い、たちまち三つの勢力が動き始めた。一つはもちろんリチャード・コックス、ヤックス・スペックス（オランダ商館長）に代表される蘭・英二国の動きである。彼らは事件の有利な解決を望み、蘭人二名、英国人二名からなる使節団を江戸幕府へと派遣した。その言うところは、ルソン、マカオへ向かう日本船に対して、「陛下（徳川秀忠）が今後一切渡航許可証、即ち免許状を付与せざらんことを願う」というもので、その理由として暗に平山常陳事件を挙げ、かの地への渡航は、ポルトガル、イスパニアおよび一部日本人商人を利するにすぎず、それにひきかえ「陛下の国土都市の蒙るべき損害は大なるものあり。日本よりルソン、マカオへの渡航が継続する間は、陛下も承知せられる如く、如何に厳しく之を糾明し制禁せらるるとも、其地から伴天連を導き来るとは断絶すべきに非らず」と言うのである。（岩生成一 訳）

つまり蘭・英側はこの平山常陳事件をテコに、スペイン、ポルトガルはおろか、最大の商敵で

ある日本人朱印船貿易家にさえ致命的な打撃を与えようとしたのである。

これに対し当然第二の勢力、長崎代官末次平蔵をはじめとする日本人貿易関係者たちが動き始めた。平蔵についてここで多くを触れる余裕はないが、末次家は元来博多の商人であって、それが平蔵の父興善の時代に南蛮貿易の利を求めて長崎に進出した。以来、平蔵の代になるや、長崎乙名として、また朱印船貿易家としてその活躍は目覚ましく、長崎貿易関係者の中心的存在となったのである。彼は自ら朱印船を派遣するほか、投銀と称しポルトガル商人相手に多額の貿易融資をも行い、いわばポルトガルとは利害を一にする存在でさえあった。その彼がポルトガルや朱印船貿易家を相手取った蘭・英の訴えに沈黙を守っている筈がなかった。



平戸・松浦屋敷、奥の間での関係者を集めての対決の様相
(カルロス・スピノラの手記から再現「鈴田の囚人」ディエゴ・パチエコ編)



平戸・松浦家の墓

彼はまず保釈中の平山常陳を伴い江戸へ上り、逆にオランダやイギリスを海賊として訴えさせたのである。これに伴い長崎奉行長谷川権六が平蔵の動きを助けた。権六はズニガ神父の顔を知っている。なぜなら、昨年ズニガ神父を捕らえマニラへ帰ることを説いたのは、ほかならぬこの権六だったからである。そのズニガ神父が日本へ再潜入しようとして捕らえられた。平戸のオランダ商館でズニガと再会した権六は終始初対面を装った。そればかりか、コックスやスペックスに対し、彼ら捕虜が宣教師である明らかな証拠を示すよう要求し、さもなくば彼らの逮捕が不当であるとみなし、「彼らの貿易を廃止すべし」と嚇しつけたのである。しかも、平戸へ向かう船中、宣教師であることを自白したズニガらは、今や前言を翻し、自分たちが単なるスペイン人商人にすぎないことを主張し続け、その上、平山船から発見された唯一の証拠品、アウグスチン会マニラ管区長の書簡でさえ、権六は頭から問題にしようとしなかった。

このような状況の中で、第三の勢力スペイン系カトリック宣教師団が、二人の神父を救出しようとして活動を開始した。コックスらにとって、真に一時たりとも気を許すことのできない日々の連続であったといえよう。

ところでこの事件の真只中であって、ついに最後まで動かなかった男がいる。平戸藩主松浦隆信である。この事件による彼の立場には実に複雑なものがあつた。平戸の繁栄は一に蘭・英両商館の存在にかかっており、その点から言えば、彼は当然コックスらに味方するべきであろう。だがまた別な事実がある。隆信は長崎の末次平蔵らとも利害を一にする立場に立たされていたのである。それは幕府が西国大名の貿易介入を禁じているにもかかわらず、彼が豊後の松倉重政らと共に平蔵の朱印船に、資本投下しているという事実によっている。

だが彼の動けない理由はそればかりではなかった。隆信の母、松東院メンシアの存在を忘れるわけにはいかない。彼女は切支丹大名大村純忠の第七子として生まれ、十二才の時、平戸松浦家に嫁いだ。以来三十余年、彼女は狂信的な真言宗徒である舅、松浦法印鎮信の圧力にも屈せず、その切支丹信仰を守り通した。現在、松浦資料館の東に「お部屋の坂」と呼ばれる坂道があるが、このあたりに慶長、元和の昔、隆信の母メンシアが屋敷を構え、一人切支丹の教えを守って暮らしていたのではないかと考えられる。

しかし、この信仰堅固な切支丹夫人が、常陳事件に際しどのような態度を示したのか、残念ながら記録にはない。ただ鎮信の圧力にも屈しなかった夫人のことである。たとえ何らの動きは見せなかったとしても、彼女が存在するという事実だけで、その子隆信には無言の圧力となつたで



松浦隆信の母、松東院メンシア

あろう。

このように隆信は、オランダ＝イギリス、日本人貿易関係者、そして切支丹と、この三つの勢力の板ばさみとなり、前にも後にも身動きのとれない状態に追い込まれていたのである。このため二人の宣教師たちも平戸藩が預るのではなく、オランダ商館がその地下牢に幽閉することとなった。

さて、わが敬愛するコックス商館長であるが、前述したようなさまざまな不利な状況の中で、次第にその人間味豊かな性格が損われていった。イギリスの利益と名誉を守るためには、何としても二人の囚人が宣教師であることを証明しなければならない。そのためには敢えて非人道的な

手段もとられた。現在、史跡として残るオランダ塀のあたりを歩きながら、その塀の向こう側で行われた陰惨な拷問のことを考える時、そこに我々が知るコックスとは似ても似つかぬ別の男が浮び上がってくるのに気がつくであろう。

それは一六二一年十月二日のことであった。この日、オランダ商館の一室で、コックスやスペックスの見守る中、ズニガ神父が引き出された。そのカルサン（袴下）のみの裸の身体には、ギリギリと絞めつけられた縄が食い込みあちらこちらから血が流れ出している。神父は十字架の形に台の上へとせられ、次いでヒダの多い布が彼の顔に巻きつけられ、その上で咽喉が死なない程度に絞めつけられた。準備は終わった。スペックスの合図を皮切りに甕にあふれる何杯もの水が次から次へと神父の頭や顔に注がれ始める。水はすぐ咽喉へ入らず彼を何度となく窒息させる。刑吏はさらに、水で脹れた彼の腹をビシビシ撲り、そのつど口をはじめ身体中の穴という穴から血の混じった水を吐き出させる。コックスが叫んだ。「もし彼がヨハネ・ゴンザレスで、ペトロ・デ・ズニガでなかったら、私の首を切って貰いたい」と。（吉田小五郎 訳「パジェス・日本切支丹宗門史」）

陽光あふれる平戸の風景とは、いかぬもそぐわない場面であった。拷問にかけられた神父は真に気の毒である。だが、あの気の好いコックスが、このような状況に追い込まれた信条を考えると、それ以上の同情を禁じえない。そればかりではない。コックスが事件解決に奔走している間に、彼の愛する妻マティンガ（お松）が不義を犯し彼の許を去った。このあと事件は幾多の紆余曲折を経て、ついには蘭・英の勝利を持って終わるが、この時期を境にして、コックスは急に無口な老人と化してしまったようだ。パスケ・スミス氏は言う。

「コックス日記は、彼が年をとるにつれて冴えがない。心配ごとや健康の衰えが身に応えたの



オランダ商館の倉庫跡 (上)
オランダ井戸 (中)
オランダ埠頭跡 (下)



だろう」と。

コックスの解任と死

さて平戸イギリス商館であるが、蘭英同盟成立により一時の活況は呈したものの、一六二二年同盟条約廃棄により再び苦しい時代を迎え、翌年十二月ついに閉鎖のやむなきに至った。そしてコックスはバタヴィアへ召喚され、審問会において「経営能力の欠如」「無責任」「業務怠慢」さらには「彼自身の性格上のこと」についてまで非難が浴びせられ、あげくが商館閉鎖のすべての責任を負わされることとなった。

確かにコックスは、管理能力や経営能力に欠けるものがあったかもしれない。だがその欠点を補うに足る豊かな人間性とやさしさを持っていた。しかし、これらを犠牲にしてまで尽くした彼の祖国イギリスは、財産没収と強制送還という形で彼に報いたのである。

一六二三年二月二十四日、彼を乗せた三檣帆船アン・ローヤル号がバタヴィアを離れていった。しかし、コックスはついに祖国の土を踏むことはなかった。出帆後ひと月あまり経った三月二十七日、彼は船中で病没し弔砲の轟くなかインド洋に葬られたのである。

平戸の埠頭に立って彼の生涯に思いを馳せていると、やがて対岸の平戸口を出たフェリーが新来の観光客を乗せてこちらへと近付いてきた。そろそろ私もあの観光客と入れ替わりに平戸を離れることとしよう。平戸大橋が完成した現在、バスでそのままJR平戸口へ行く便利な方法もあるが、平戸を離れるには、やはり船が一番ふさわしいように思われる。



オランダ燈台の跡